

## ふるさとのミカン山と活断層

松村みち子

(タウンクリエイター代表)

私のふるさは神奈川県小田原市の<sup>こうづ</sup>国府津という地区で、1954（昭和29）年に小田原市に編入されるまでは足柄下郡国府津町といった。明治から昭和にかけては、交通の要衝として栄えた街であった。なぜならば明治時代にはじめて鉄道が開通したとき列車は国府津止まりであったし、東海道本線が全通してからは、この地が機関車の交代や列車編成の基地だったからである。国府津機関庫はフランス人技師が設計した扇形の優美な姿で知られ、鉄道施設としては日本で最初の鉄筋コンクリート構造物であったが、残念ながら現存していない。

そもそも明治政府が東京～神戸間を結ぶ幹線鉄道の建設を決定したときは、「海岸沿いの路線は防衛上の弱点が多い」という理由で、中山道ルートでの建設が計画されていた。しかしそのルートは碓井峠をはじめとする山岳地形のためあまりにも条件が悪く、東海道を経由するよう変更されたのだった。1887（明治20）年には箱根越えのルート、すなわち国府津から御殿場を通り沼津に至る、現在の御殿場線のルートが確定された。同年、新橋～国府津間に鉄道が開通し、1889（明治22）年に御殿場経由の東海道本線が神戸まで全通した。小田原は幹線鉄道から外れたものの、その後東海道本線が国府津から小田原、熱海を経て沼津に抜けることになり、1934（昭和9）年に丹那トンネルが開通してからは急速に発展した。今ではJR東海（東海道新幹線）、JR東日本（東海道本線）、小田急、箱根登山鉄道、伊豆箱根鉄道（大雄山線）の5つの鉄道が小田原駅に乗り入れ、駅長が5人もいる全国でも珍しい駅になっている。

逆に寂れたのが国府津である。小田原市に合併されてからは市の東のはずれということもあって、市の主要な施策からは取り残された。

この街は相模湾に面し、小高い山を背後に東西に細長く伸びている。砂浜からは江ノ島、伊豆大島、伊豆半島を望むことができる。温暖な気候はミカン栽培に適し、背後の山は耕されて山頂までミカン畑となった。

ところが近年、耕作されないミカン畑が増えてきた。遊休のミカン畑は5年で荒地になる。ミカン山は潮騒の音がきこえるほど海に近い。荒地の表土は相模湾に流れ込み、海を汚す。

「これではいけない」と立ち上がったのが、国府津商工振興会の奥津弘高会長をはじめとする有志だった。奥津さんたちはミカン山再生に向けて、背丈ほどに生い茂った草を刈り、荒地を整備して、放置されていたミカンの木の手入れを始めた。2003（平成15）年6月には「国府津みかん山再生倶楽部」を発足させた。その年、収穫されたミカンはざっと300キログラム。その一部は、正月の2日と3日に行われる慣例の箱根駅伝で応援にきた人たちに配られた。

実は小田原市内には遊休農地が約234ヘクタールあり、その90%以上がミカン畑の遊休農地である。市では農業が抱えるさまざまな課題を克服するために、2002年12月に「構造改革特別区域法」が公布されたことを受けて、国に「都市農業成長特区」の申請をした。2003年5月23日に、小田原市は「都市農業成長特区」として国から認定された。特区認定により、農業生産法人以外の法人が農業に参入することが可能になった。

そこで、「国府津みかん山再生倶楽部」はNPO法人格の取得に向けて動きだし、2004年3月にはNPO法人「みかんの花咲く丘」として認証された。同NPO法人は、荒廃したミカン畑の復元・維持管理を主な目的としており、市との間で国府津地区の遊休農地78アールを借り受ける契約を結んだ。

私が奥津弘高さんと知り合ったのは、2004年1月に国府津で開かれた「井戸端ミーティング」に個人的に参加したことがきっかけだった。奥津さんはミカン山の再生活動だけでなく、地元の歴史や文化の掘り起こしもしていた。奥津さんから教えてもらうまで、私は自分が生まれ育った街が明治から昭和にかけて「別荘の街」だった



ことを知らなかった。

何と、気候温暖で風光明媚、かつ明治期に交通の便に恵まれていたこの地は、当時の実業家や文人たちが次々と訪れ、滞在し、別荘を構えた街だったのだ。

市の審議会委員をいくつも務めているにもかかわらず、そんなことも知らずにいた自分を私は心から恥じた。市の資料には一度も出てこなかった情報ばかりだった。午後7時からのワークショップに、都内から足を運んで参加して良かったとしみじみ思った。

奥津さんが丹念に調べた記録によると、当地には幸田露伴、島崎藤村、福沢諭吉、志賀直哉、有島武郎、坪内逍遙などが訪れ、小説に書いたり短歌に詠んだりしている。変わったところでは寺田寅彦が小田原に地震調査にきたとき、国府津の旅館に泊まっている。別荘を構えた人の中には早稲田大学を創立した大隈重信、建築家で宮本百合子の父でもある中條精一郎、小岩井農場を創業した小野義一などがいて、宮本百合子は父の別荘を度々訪れ当地に滞在したという。別荘のいくつかは現在も残っていて、文化遺産としても貴重な価値がある。2004年5月には、現存する「諸戸別荘」で「川田正子さんと歌う『みかんの花咲く丘』」という特別企画も実施された。

さて地震活動や活断層について関心がある人なら、国府津という地名から「<sup>かんなわ</sup>神縄・国府津－松田断層帯」をすぐに思い浮かべるに違いない。日本には主要な断層帯が98あるが、その中で同断層帯は今後30年の間に地震が発生する可能性が最も高いとされている。

地震調査研究推進本部地震調査委員会では、数年前まで同断層帯の評価を「平均活動間隔は3000年程度、M(マグニチュード)8.0程度の地震が30年以内に発生する確率は3.6%」としていた。ここ数年、詳しい調査を行った結果、12世紀から14世紀前半にかけても地震が発生したことがわかった。この新たな情報を受けて、同委員会は2005年3月に、「平均活動間隔は約800年～1300年、30年以内に地震が発生する確率は最大16%、想定される地震の規模はM7.5程度」と修正した長期評価を公表した。これによって、神縄・国府津－松田断層帯は全国の主要断層帯の中で、地震が発生する確率が最も高くなったのだ。

公表された地図を見てみると、この断層帯は静岡県の小山町から神奈川県の山北町、松田町、大井町を通って国府津まで延びていて、長さは25キロメートル以上という。どうみても私の実家は断層帯の真上か、すぐ近くだ。

おまけに小田原では、現在から200年以内に発生する可能性が高いとされている地震が5つもある。「神縄・国府津－松田断層帯地震」、「東海地震」、「南関東地震」、「神奈川県西部地震」、「神奈川県東部地震」の5つで、どれもM7から8クラスの地震だ。

母と妹一家が暮らしている実家から浜辺までは100メートルもないだろう。そして背後はミカン山。その間に、国道1号と東海道本線の線路がある。奥津さんもその仲間も、私の幼なじみもこの地区に住んでいる。

新潟県中越大地震が発生したとき、NPO「みかんの花咲く丘」のメンバーは被災地用にミカン1000kgを収穫し、届けた。この地に住む人は、災害発生時に行政ができることには限界があることを自覚している。民間の力と知恵とで断層帯と共生していくしかないのだ。

イラスト・宮内かおる